

虐待された障害者 2,659 人 施設内が増加傾向（2013 年度）

厚生労働省は 11 月 25 日、2013 年度に市町村などが把握した障害者虐待が 2,280 件あったと発表した。被害を受けた障害者の数は、養護者による虐待が 1,811 人、施設従事者等による虐待が 455 人で、うち 3 人は死亡。7 月に公表された職場の上司など使用者による虐待の被害者 393 人と合わせ計 2,659 人に上った。

調査は、虐待を発見した人に市町村への通報を義務付ける障害者虐待防止法が 2012 年 10 月に施行され、自治体の対応状況を集計しているもの。前回は施行後半年間だったため、1 年分の結果が出たのは初めて。

結果をみると、家庭と施設では暴行、暴言などの身体的・心理的虐待が多く、職場では賃金を払わないなど経済的虐待が多い。また知的障害者の被害が目立つ。件数では家庭での虐待が 1,764 件（前回は半年で 1,311 件）と 8 割を占めるものの、施設での

虐待が 263 件（同 80 件）と増加がうかがえる。

養護者による虐待 1,764 件は、身体的虐待 63%、心理的虐待 32%、経済的虐待 26%、放棄・放置 19%、性的虐待 6%（複数回答）。虐待を受けた 1,811 人の障害種別は知的 51%、精神 36%、身体 26%、発達 2%（同）。虐待したのは父 21%、兄弟姉妹 20%、母 19% だった。

施設職員らによる虐待 263 件については、身体的虐待 56%、心理的虐待 46%、性的虐待 11%、経済的虐待 7%、放棄・放置 5%（複数回答）。被害者の 80% に知的障害があり、身体 29%、精神 14%、発達 6% となっている（同）。障害程度は区分 6 が 24%、次の区分 5 が 17% と重度の傾向があり、行動障害のある人が全体の 21% を占めた。虐待したのは生活支援員が 44% と最多だが、管理者（10%）など責任ある立場の人もいた。

（福祉新聞・第 2695 号 2014 年 12 月 8 日）

音声ガイドの映写施設、都内に常設オープン

視覚障害のある人もない人も一緒に楽しめる音声ガイド付きの常設映写施設が、東京都北区の JR 上中里駅前に 11 月 22 日、オープンした。映画のシーンを吹き込んだ説明を FM ラジオのイヤホンで聞きながら鑑賞する。音声ガイド付き映画は公立図書館などでイベントとして不定期に上映されているが、常設施設は日本で初めて。

施設はバリアフリー映画鑑賞推進団体「シティ・ライツ」（平塚千穂子代表、☎ 03・5980・7985）が開いたアートのスペース「チュプキ」（アイヌ語で自然の光の意）。

元住居だった吹き抜けの空間に幅約 2.5 メートル、高さ約 1.5 メートルのスクリーンを設置。ボランティアが吹き込んだ字幕や情景を聞きながら 20 人ほどが椅子に座って見ることができる。

シティ・ライツは 2001 年発足。視覚障害者から「耳元で小声で説明を」と映画館で頼まれたのを機に取り組み、これまで約 200 本に音声ガイドを付けた。

脳性マヒの男性の日々を描いたポーランド映画「幸せのありか」の音声ガイドチェックをした 12 月には、ブラジルのテレビ局が取材に訪れた。盲導犬とともに参加した女性は「時間のある時にフラッと行け、駅のそばでとても便利」と喜んでた。

今後はドキュメンタリー映画や新旧作品の上映を検討中だが、平塚代表は「見たあと感想を語り合えるような場にしていきたい」と話している。

午後 1～5 時間開館、上映は 2 時から。水曜休み。ワンドリンク付き入場料 1,500 円。

（福祉新聞・第 2697 号 2014 年 12 月 22 日）